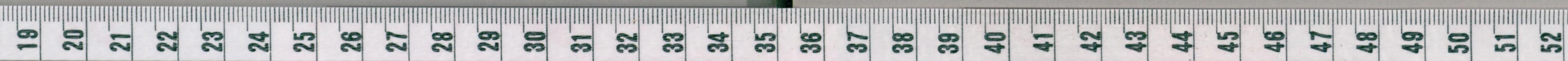
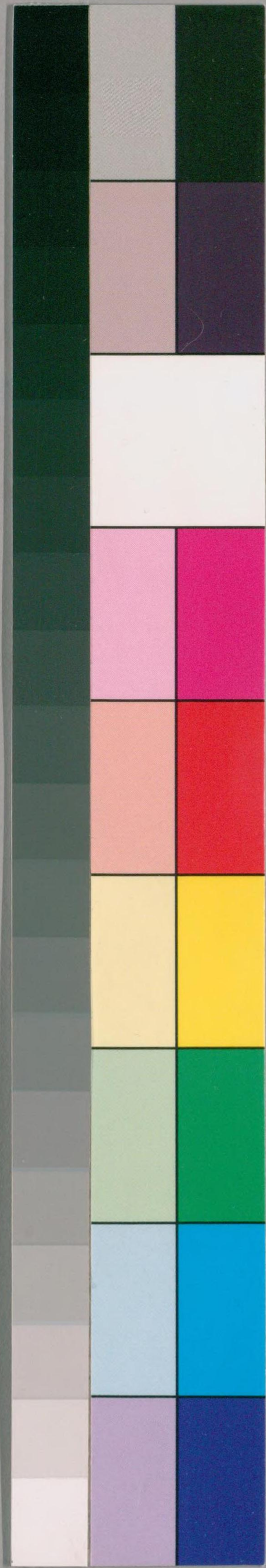


863
117

星の林



国立国会図書館 タイトル『星の林』 請求記号 863-117

ガラス使用

863-117



軍成春

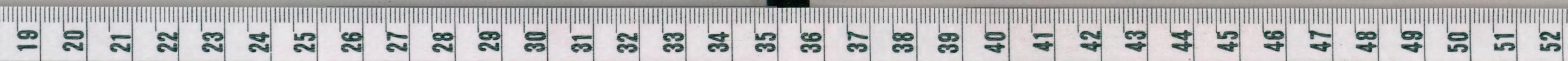


星の林



秋香菴

鹿苑舎淋山著
秋香菴國村校





星の林

遺稿

獨吟歌仙半打

古
巢
兆

明月一ひさし中夜を照らす
石の面も毛の毛の毛の毛
雲の焚杉も権をくも
土照相の明るる
相丸太いよ掉や
中も旅の思ふ家又

余ののり破り
奈様の酒乃
今此を其面
のりり田地を
河
弓小宿おく
往々旅を幾
限村あり
寂し

五

四



百は足子の初く蒙子

花の雪あけ馬の腹ふり

昔のふれ藪ふゆと痛戴く

次頁

比水の風は初らく塔は歌

流るらん中包まぬの壳

こけぬも世くもけと物ねひ

鯉の口はうらとたる体

淋山

燕市

有圭

國村

柁橋もぬきりほり此さんと津

十石あやうと麻と即くふ

曉鳥もや控待りぬ免きく

根津の糸は鼓う川も

秋風の肩を楫も赤吉許際

露を赤手に下敷海てん

澄月此隣むつそく静あま

稀よ杉葉此竹も涼しき

村の名をせりもさうしき古馬屋

柳翠

圭

市

翠

村

市

圭

村

翠

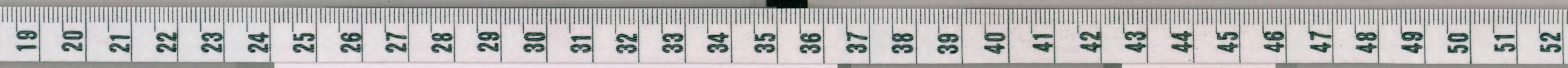
翠 此火繩のうりよめは
 冬 川ぬ径中をさし何れも
 雪 拵んさし雪の底を
 翠 花より家此昔積りし
 柳 酒名歌をさしし柳

淋山一 燕市四 有圭四
 國村四 柳翠四 業一

君子千里同風

雪 二日續く梅名はあしうね
 幸 流れぬ雪をさしし猫の恋
 青 柳の影をさししかきら川
 川 をさしし芥は古根も雪の水
 湯 糸をさしし雪の影をさしし月
 お 雪をさしし枝をさしし雪の影
 袖 乃雪をさしし雪の影をさしし

洛
 茂良 金菜 岱李 梅價 笑九 五芳 雪雄



川息の新居まゝり啼水翁

大和

蒼虬

下木あゆむは長流あまの梅のむ

河内

万和

梅言〜 葉と流るるも出づ花ら歌

堺

来紀

清なる汲家此かまへや暮るる月

浪花

浅所

おめ〜 弱きり此より芒より歌

浪花

菖笛

雪雪の移るあや梅も西あのをと

浪花

喜齋

あま〜 かく先信は〜

浪花

手煙ぬ〜 方あ〜

浪花

稲は〜 小あ〜 入〜 久〜 鏡山

浪花

長齋

燈籠や山の旭を幾代あ〜

星譜

又〜 通ふ甚だしく〜 やけ〜 花

三津人

老懐

寐覚す〜 小夜此踊を枕上

魯隱

婿〜 にか〜 ことむ 升れ月あま

自楽

起〜 や梅も〜 流るる水

祇杖

言〜 らぬ〜 事き〜 菴の用

眉鳳

も〜 然る〜 や〜 事〜 顔〜 せ〜

井左

も折〜 事〜 も〜 かく〜 川〜 出〜 木〜 槿〜

若助

何ふ物もあめりきふるも
け堤ふか食振るもふるの
白鳥姑ふかふるも
暮るは皆我れを
筆れ入らふるも
しふるも大小名れ
ふるもふるも
秋のりきふるも
ふるもふるも

井眉
百堂
公路
屋鳥
奇測
省吾
路白
六車
椿堂

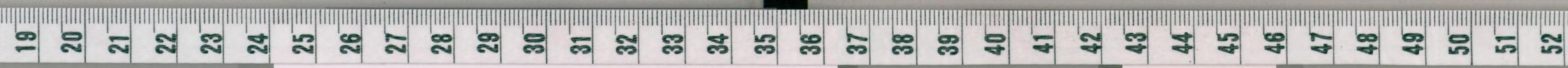
伊勢

五月陰中寒

都公整然れいは
まふもやふるも
ふるも二人も
かんふるも根も
美し門を陽きの
想ふも上も
紫着柳て結ふ
流る物もふるも

梅間
不轉
我竟
岳輅
塊翁
木天
足彦
少女

名古



因一經手を山家れもをるに

月底

嗟ふ如村も大なるく山家くも

三河

卓池

進くや世一も飯免も也

秋攀

破海老の毛を日すく秋の風

梅老

を解やめをいふ依とに

木芽

朝うぬや我も世へ人あぬ

甲斐

有斐

空也の下は善男子を舞と

佛子子に雙やばるぬ瓢の如

嵐外

新かしのこころてえく柳う程

蟹守

こわくくと一梅子あて州の流

重行

大風おもてり初すや保屋袋

百二

夕暮をゆく申仕舞ぬゆりか

才馬

白き結もつとて無病の言の都

一作

我老を空も知られくをた月

漫々

串途の四沙汰も知らず青簾

伊豆

一瓢

惟子れぬくはあや神也州

有鱗

言のまもてあもててねの雨

相模

方解

面白くもあもてり山の冬

堆塚

人き廣ふ門遠く秋の音

江戸

成美

静かな甲子流す深みか

松夫

清くくや浅き雨下深きあはら

浙江

みちききき月のまよひのこころしはや

まの事しはうきき別次平ゆき

太節

昭十方刹

古くは清く正火清きや第一は

黙齋

清くは清くぬきあはらや 初り結

確令

あはれはあはれなりふつとく楊のあ

秋耳

押さくもゆきあはれ戸口か

何丸

一編の牡丹ゆきかぬきり

蕉雨

静かなとあはれと牡丹あはれ

玉光

芒れとあはれあはれあはれあはれ

久藏

あはれとあはれあはれあはれあはれ

鶯笠

あはれとあはれあはれあはれあはれ

心非

小坊まはれ楊のはあはれあはれあはれ

荷乙

静かなあはれあはれあはれあはれあはれ

車両

ふ二の山をまはれあはれあはれあはれ

孤山

水傍の草葉をくはる甲に

鞠塙

野まや田川よひきゝ水の音

其乘

五ふ田の丘隅持より蓮の花

九朴

田植頃ふいふくくや呼ぶる

春葺

草菴

白葉はくきふあけふ煙はる

一峨

父母よ先ずくえきり更衣

氷靴

辻番の草花あやも小半を

應く

氷の泡よ競ふもあまねかきり

碩齋

降あふくく小まねもゆや夏かき雨

對山

る降やむらさき臺はゆきま

仙骨

きみゆれや白くはらば雲の流

諫圃

さうれ遠きも列あすき星の地

春樹

拂ふもや雪よま如丘のほくも

護物

祖畠やま雀橋切ふまのよ

柏舟

谷うけや空をうつり几中

寥松

皂角は流しみまきまの枝

芝山

え形り様持もやまを海

屠龍公

近傳の釋氏と請法延

淋—きんは是や—し—きんは

旭波

名—つらへ—せしは—梅也秋の

归来

跡—もや—し—梅を—書—述—

梅仁

住—吉—く—存—あ—り—て—か—

南井

小田系は使女家、吹もその船

逸帆

静—さ—り—し—し—仙—う—り—し—

之

き—ん—の—あ—や—四—五—り—

珍齋

跡—も—あ—り—や—ね—風—を—

東甫

浪—う—り—き—ん—の—あ—

波濤

又—衣—破—り—し—し—し—

邦子

春—あ—り—し—し—し—

其阿

曉—の—眼—の—し—し—

兔林

跡—も—あ—り—し—し—

無染

和調亭残菊會

山—影—や—枝—木—に—依—り—

即梅

跡—も—あ—り—し—し—

白圭

自—然—に—あ—り—し—し—

東子

朝うおは来と流の毛流をふ

語竹

灌仏よ菊草とる物おまを

山朝

吹流すり珠数もは露や露のを

斗月

好あまはかきく淋とと拾ふが

野遊

さうくー草お梅金は菴の那

夫山

うゝ歌

文書お空もかきりー秋をさ

鯉夫

澄りさきい平あねや空を

子行

月山よのあはれ時

菴小屋の空をえやとて秋のま

如竹

暮れ夜かんをあえりも濁る

洗志

あはれ月隣の中ー物乃さ

青涼

芦の穂や笠あー秋の月お

日照

こり月と清いもあけぬや枯屋を

呂律

己うおれ空あをさあふそその那

三千雄

虫岡よ相お入らわ小雨かふ

遠菴

さる直く子よあおるか

楽只

拜殿よ言はる時見しあ

露月

落舟の楳小旭姑あつらふり

青牛

日何きらふか居舟く白紙衣のな

如弓

留脚路本氏何まそ高申と

討りしるの接写

苔あいのくきと道却りて却りたる

國村

持ちしら次種も真姑あつらふり

五樓

寺姑あつら討りお花見て廣り

金河

村あつらふり寺姑はつらふり

中茂

夢あつら寺あつら見や存のな

玄来

我うあつらつら笠のなつら柳小

葛二

梓やあつら女姑も強きおまを

二柳

了らつら次るや夜更の夜つら

梅之

一あつら子菘虫風子あつら

李喬

松風れつらつら吹やあつら楓

珍眠

潮来沼睡望

秋きつらつら流のよははくつら

花曉

つらつら野里同歩何つらあつら山

唇北

難考のつら暖城の島れあつら

芳水

十六

十四



夕飯の言ふもちふ一葉の心

可良久

朝白や雨あつらふ一葉の心

李川

森の言と送らねるに

五渡

きりくほせや花の河一葉の心

除松

花とあつらふ水河の言と送らねるに

水佳

霧の梅海に柳あつらふ一葉の心

邑子

庭火あつらふ一葉の心

素頂

も風や柳あつらふ一葉の心

芝堂

志のうらみり一葉の心

耕齋

門先の言と送らねるに

杉長

庭火あつらふ一葉の心

省我

山居

安房

人あつらふ一葉の心

槐里

勇気あつらふ一葉の心

素迪

きりくほせや花の河一葉の心

至長

も風や柳あつらふ一葉の心

下總

山影や柳あつらふ一葉の心

素迪

きりくほせや花の河一葉の心

至長

孤立集著

梅のこころは我の心なりとあり

李峰

まつ風は梅の香を福しり山家

如栞

昔は梅の心は魚の心なりとあり

桂丸

浦島の子は行くせん後世は誰

蒼峨

茶のまはるる月を心とあり

茶彦

柝のこころは吹かぬ松の那

夜哭

床下はあやも水鏡のまはるる

普記

まはるる心は梅の心なりとあり

北尼

押身一日はあやもるる月の

廣陵

持よりて梅の心は梅の心なり

雨塘

まはるる眼はあやもるる心なり

去雲

田舎の上は梅の心は梅の心なり

竹加

望梅の心は梅の心なり

李尺

一かけの心は梅の心なり

松江

梅の心は梅の心なり

渾堂

望大根の心は梅の心なり

輅齊

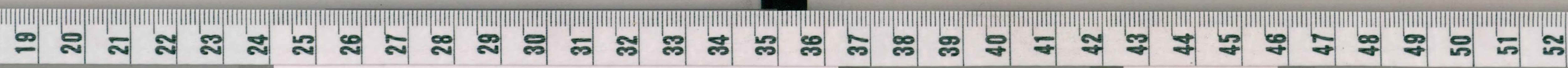
まはるる心は梅の心なり

左裏

堂陸

十七

十六



は風や葉を吹くもさるやせん

近江

鳥頂

寛永寺

雨得て一花よれ多に淫少す

可盈

青くよる物もさる花の上

千影

戸のまを梅枝より月夜介

志女

空は梅くまもあまを猫の姿

春雄

啼きよる思言もさる待きより

文常

新りあまの国他も垣根のふ

于當

はしら水鏡も失く消もくも

儲央

飛騨

集らよる喜も花も水田に存

善光寺

艸司

わつちよるてから梅も竹もより

汝蘭

きこりよるもかきぬ梅起らふ

杜厚

梅枝も乾もさるは田今空

呂吹

春もよるもまきけり梅のあ

可厚

観蓮

月夜もさるもあまの花

素壁

あまの田一歩もさるかんらる

雲帯

あまのまもかこら草

如毛

十八

日おきくむんのすゝめ成り
桐の葉もと洩る月のたるか
水も月もさう切あつと掌は松
そま住をすねて解する門の重
日か入のちうてはるふれ九月か
遠里の杉と霞は霧のつゆ
鳴まやそまうし海向人乃門
あつーや離子二又お小哈
沢磐お癖一筋あつ雪解は

若人
微席
武日
一系
上毛
月鴻
采室
玄く
壺半
阿兮

白くくた癖もせはよまは重
ふゆりもあれまゆつせも獨り斗
枯くもあつととあはあつおれ
吾鴨も早うまもやゆり花
星流も水鏡も知らぬ月夜下
菊のふみもやうやうお周も入
船の夢もあつとと此と抱きまう
豆敷もふれあつととそそのお
四阿もあつととや合款のお

下毛
茅唐
車隣
紅碩
廉太
雄尾
和井
官鯉
麦茂
あつ記

初月より風も持るや 帘

吳竹

静なる早物もなれ秋の聲

浅見

五窓一ツ言由しる月の名

凡鳥

雨名同や芒を納む水

素考

小畠も持る静の如流も所

星谷

翠りあしるも鳴る冬山

北成

本道寺帯田

病知らぬ思ふ何事か物も言

仙台

百非

十ッはるも梅も消はむちる山

日入

孫抱るも居た下もや東山

玄圃

沃深なる之隅も草も花も

二晶

蒼空にそそ我影印する草花を

月哉

山中暮るも人淋し月

鬼瓶

裸も少く砂川もくさ知月家

士由

空も動やすもくを母も一子

青良

雲もくもは中もくもく芒吹

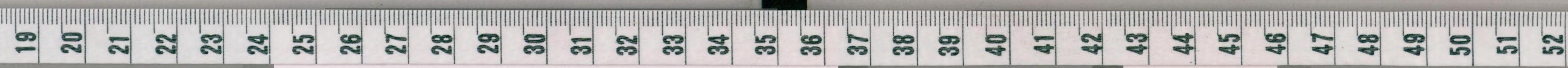
志柳

旅もくもく心れもくもく春の如

東磨

席一枚も持るもあねや茨之月

世竹



川骨や水と流す日此等
短衣の月や何らしく井の
坂の知らぬ菴や猿又月
揚灯は佛々門をさすの
窓猫は寝る所もまぬ
瓢箪も糸瓜の皮も風乃
若くはさきさきと秋の
露の身れやとや月夜と

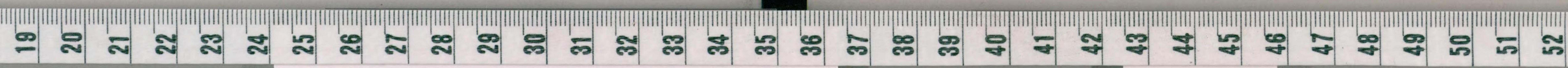
羽黒山宿定

馬年
柳村
江三
路入
雄測
き安
継女
亀丸

清くくくく流るる南谷
庭はうらな井のあはれ
蓮一葉浮や嬉しき
さきれりし里の木の
さやや二人しき押
一日さきく二りは秋乃
有知思

伊達

醒齋
十竹
乙二
冥く
五陵
芳齋
子人
白



曙をうれー藤屋の好歌

雨考

小鳥の鳴りおぼろげや 富 草の露

うつこ

多岐戸や霧かゆめけり

仙彦

け 秋を覚えずはやー天の川

撫淵

陽をぬれ 露も落し 松葉の

夢南

まをぬれ 露も落し 松葉の本

南鶴

よつやとて 風を吹くも 揚ひき

紫山

む 芒南此風う 雪ーなる

松人

風や 霧うら ぬきく 言はる

竹二

三春

鶯を居根あけり 五月晴

帆中

眼を鼻より 五月晴や 梅柳

俳仙

白川や ぬれ 糸のむすく

朴齊

独り ぬれ 糸のむすく 白ゆらん

嵐叟

深う ちこ ぬれ 糸のむすく 足ぬへー

路柱

市中を ぬれ 糸のむすく 月又の 輪

鬼風

曙を ぬれ 糸のむすく 月又の 輪

湖秋

竹を ぬれ 糸のむすく 紙衣の

如髪

太刀持を ぬれ 糸のむすく 月又の 輪

月歩

相馬

會津

秋のくらしやいささかよき秋のふ

阜雄

我り菴のさきをてしうし終月

双竹

きり戸やさうさうぬ氷さほ

楚雀

あかりから雪のうらみさう秋の山

馬令

あかりのさきをてしうし終月

左城

灯火やあかりの涼き物の数

卓呂

文政乙酉五月十二日没

きのりや寒枝さうあさくさ

平角

ねのさきをてしうし終月

楚山

南部

雅のものと共いりし時

うかしのさきをてしうし終月

五松

雀のさきをてしうし終月

寛兆

さきをてしうし終月

蘭溪

月のあかりも時をさきくさる

彦貫

年終りあかりも時をさきくさる

淡水

江のさきをてしうし終月

子龍

玉川のさきをてしうし終月

淇水

行かやうし終月

北溟

我う物くもに御しそり塚の家

足くらやとちし向きのも葉は露

海よりしるし書に泪をそそぎし

不きししきよまを立おきむねのふ

まきそはは影くしなりは露を露

白牡丹散るる藤末の成ゆり

雪の散るる森の何ししり中し小橋く

る長閑樹も撰あ寂ふ夕

坂き火やまきくも待下森入

六須美

汎兮

谷雄

南兮

英里

春岱

聿修

百歳

風影あさ月影あつうよ細代守

おやそらよ日枝の風や露を露

風若果中は果つる節よ夕芒

七曲まのつるまき清くあか

湖へまのつるまき清くあか

水多れ菓子瓜分家 渾身

きしりまきし海の客もや春の連

皆空やしるしちあかう山橋

仕合はまふ小窓やあゆの葉

松澤

千秋

白鵬

文里

蝶巢

錦水

机月

吐月

如水

廿四

直哉
白鳩

獨居

箱館
布席

弘前
王之

秋田
御風

五瓢

野松

巴陵

古翠

咫雲

石嶺

素岑

槇露

柳

乙負

其山

宇喬

北

降る此雨は追ふか芒が那
 多結ひか城の子はあ腹
 子に号一人の畝り五形あり
 涙濺子ゆり人無泣く年の音
 鴨立や山く音を押しゆく家
 一斗節多町中へ出る清水の舟
 吹風此足えり舟早苗は
 汐をうく指さ相一葉
 冬此梅折角多事考れり

乙塙 不材 桃語 杜園 淇竹 麤岑 凌洲 太橋 稻丸

湯殿山籠

浩られぬ方子人形年とらふ
 心より一夜降り寒雨
 旅寃病中

最上
 行人
 宥海 左洲

鶏待を力に多を名表を落る
 ももや菊日忘れ一程瓢
 雨乞り三り立く雲の峰
 中ゆらーや夕佳く本風のお曇
 於戸出と凡の白いや市中

龜年 瑞元 文阿 素風 舎月

持き給子冬月待てつひ

守月

津美し人あもさや着き

玄風

人さるまは流立以て温

一湖

さくく笑人もあまり上

壽山

旅人の望うた夢の如月

其行

御筈金や知る人さる夕日

素山

形水く歌く為守りく

思山

番り子れ麻顔すくは

嗽石

年さつく歌く馬れ

楓二

世を願ふくは世もく

二丘

世に隔る垣根をく

此由

琴の音の風もく

塗山

春柳よがく風若く

吐雲

初雪や控ふなき

稻舟

流塵下女の嘆もく

此流

日さくくは松の下

如雪

春柳よ隠るく

柳笑

加賀殿の雪若く

境水

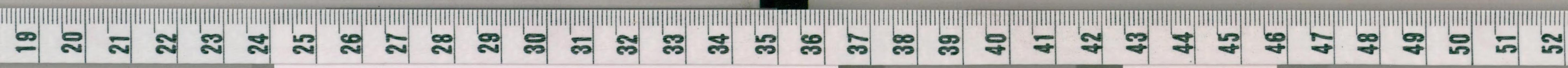
半おれ隣の妻さへあふれ
 有井
 家のもまへく伸ふ隣り
 有井
 る士歩能唄さるや揚句も
 艸雨
 畑おのなとむらさき一馬
 桑雨
 引もや水も優く鴨は
 平車
 あらぬあゝ口はきく福と
 以後
 妻さるきささかあ一牡若
 稻洲
 傾山の形を志ら一
 泰々

巢兆佛の追福を

山
 淋山

室上川舟中

加賀 箕青
 山松の落つて空や土草
 越中 雪丸
 こから一れ中を引取り角大
 越後 乾夫
 交癒る木草も出さる
 石海
 山を能みぬぬまき乃
 幽囁
 椿もさる雪もやさる
 丹波 武陵
 夕陽りいれぬ一もや野の



蕨の事おもふ處むや背戸の上

但馬

鬼洞

初菘もとも出さや小菘は秋の萩

出雲

三津

胸の若小江門赤し今秋の秋

吉備

花叔

おとろくもや秋の萩も秋の萩

閑齋

處一万

安藝

玄蛙

七浦を掃や千とせられ煤埃

筵央

裏のむりやあけり一程をたよる

篤老

板つらに世もえなうあやを京

阿波

西里

山里を掃く阿波もさき月夜は

又々物もあし秋の萩も夕の那

筑前

四軒

千とふし付きあふりも秋の萩

長崎

仙芝

草花もあや秋の萩も夕の那

肥後

仙斧

百合もあや秋の萩も夕の那

三考

朝日れ日入りけし免に揚句なり

日向

巖冬

柴のりもあや秋の萩も夕の那

真彦

うらなもあや秋の萩も夕の那

薩摩

琴洲

文居

うらなもあや秋の萩も夕の那

オク

且く

廿九

麻栲る斤道舟や伝主栲

竹邦

老るちを著く跡如法る不

淋山

善如山人へ得ん事も多しと

永木

是如くに根も多き如法栲

夙也

第末子似く本隠き後の月

桐栖

世を切の考ふもあきき秋の昔

洞と

物影も一ツよ入るや月の前

順齋

眼のさあきき淋き念ふ

采佛

涼しやく云せしあきき霧如く

春躬

獨妙律師の粉栲秋と云

大津よりさきまを尋る月如く

尾張 東陽

尻弱くはあやきも池の芥

武蔵 へく磨

裏白れくはくは余きか

詠帰

秋の田れ刈りし何ふも寺の森

碩布

我秋の子うり桂燈日和のあ

梅香

まき空より流四五り如本如青い

白児

初雪や馬も出よる此叢乃夫

賤子

か味男のまつきてあき五月の

野蝶

三十一

よしの家

連嘆や清堂免くつとく彩らま

三巴

花より世を遊く宴此入念佛ら

一雨

仍存若夕を忍ん酒をや

春嵐

山より秋野舟追まそ梅定

青花

非酒切らうゆと呼まる松臭爪

豆箕

男やふふくをまくも磨り

麦花

花よりやまはあぢういの葉ゆら

觀里

浪風の鼻より砂や海や谷の梅

鯉隱

さし波子とまれま計の和布介

燕市

陽炎や云霧か管ふ都人

葉蛾

美し起うら吹かへすを此風

琴女

侍をやちやわと暮るり春の風

まきめ

昨乞ぬるを静るるる柳を

菜山

葉少くもあはれを折く小ま

廬山

秋風結灯も消ゆるを柳ち

輕雨

咲く小眼もまつものを枇杷の

稻波

夏より受ふるこころをうら

歡水

黎明

梅をくく上世は種を南くくえ

蒲生

梅枝

待近る夜や世の中一光物の音

青楓

役立を寺侍り山はを武

桃牛

うか〜〜日暮あり梅のむ

自来

株よゆ啼きしては月あつな

陌杏

多此言の世別〜るを花を望くれ

秋月

涼〜〜はおり〜るを浪乃言

北林

眠る月〜言る〜出合小斗か言

柳翠

鷹狩や方明月は儂〜つら

菁莪

稽唯影字表や花は〜は

酔夢

新起の笑顔なり梅のむ

文虹

時よま〜松の葉〜は言り

始一

春よま〜花〜は言り

東里

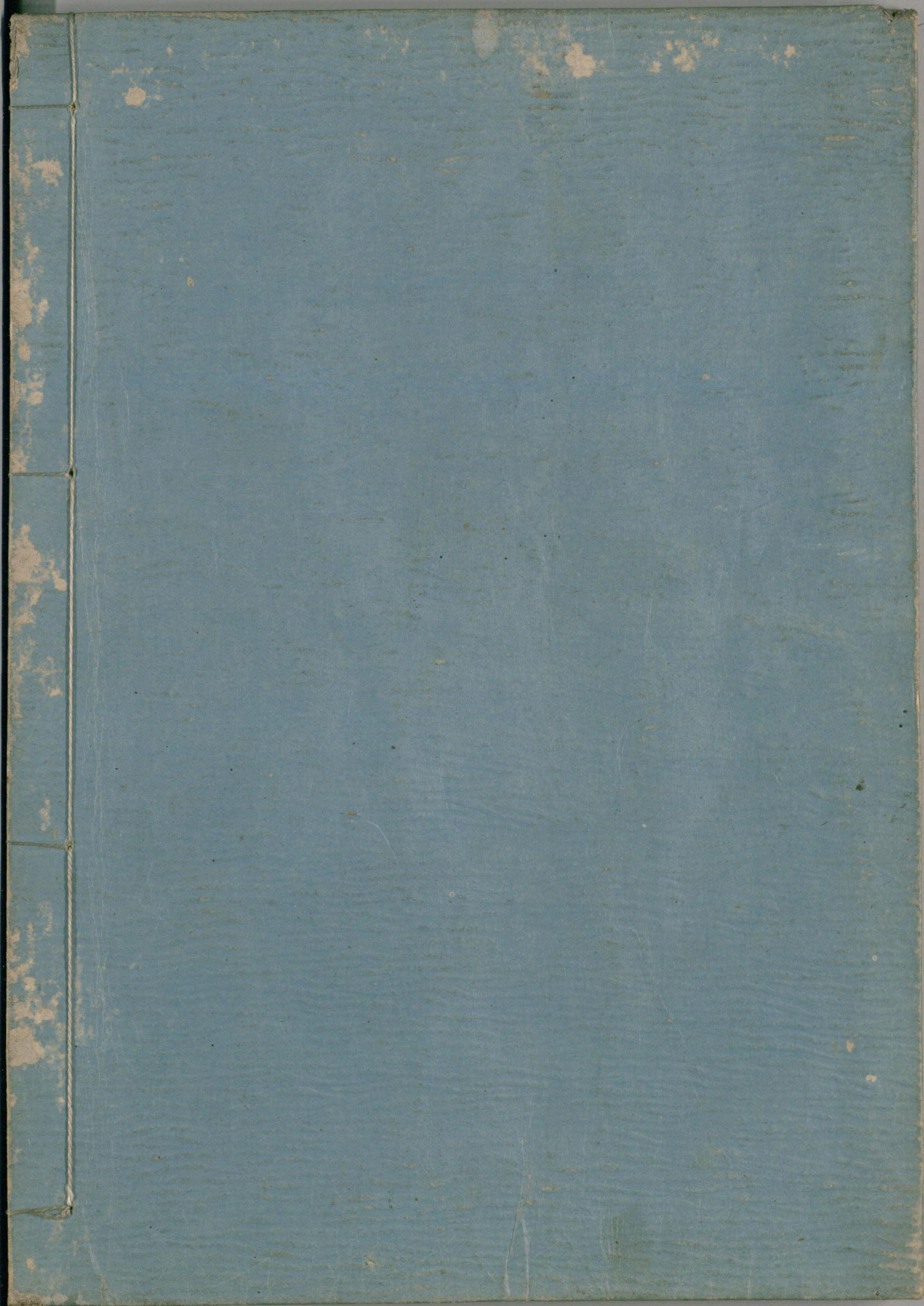
春〜〜を水鶏川あ〜塙の結

有圭

春上への言りに

ふ〜あ〜言り〜を稲の花

国村



国立国会図書館 タイトル『星の林』 請求記号 863-117

ガラス使用